

忘れてはいけない尊い若者の命

忘れてはいけない日本の戦争の歴史

そして、後世のために今私達ができることは、彼の思いを、伝えること。

そう考え、佐野元さんの「実話」を紹介させていただくことにしました。

---

「家族のために、日本のために、

必死の兵器「回天」に自ら志願し、

敵船団を轟沈した 戦士 佐野 元さんの歴史」

生年月日 :昭和6年12月25日

没年 :昭和25年8月11日(行年 19 歳)

---

## 1. 回天(人間魚雷)とは

みなさんは、「回天(人間魚雷)」をご存知ですか？

「回天(人間魚雷)」とは、

太平洋戦争時代に日本軍が考えた新兵器。

「天を回(めぐ)らし、戦局を逆転させる」兵器として開発されました。

回天は大量の爆薬を搭載した魚雷に、

人間が自ら乗り込み、操縦し、敵艦に体当たりするという

必死の特攻兵器。

脱出装置も、通信装置もなく、ひとたび母艦を離れば、

事の成否に関わらず、生きては還れない。

目的はただひとつ。敵の艦船を轟沈させることのみ。

戦局が悪化し、当時日本にとって残された道は「特攻」ただ一つだった。

海軍創設以来、認められることのなかった

「必死必殺」の兵器として生まれた「回天」

まさに「体当たり」の兵器。

世界に誇る「九三式魚雷」を

改造した「目のある魚雷」での特攻作戦。

最高速力は、30 ノット(時速約 55 キロ)

1.55トンの爆薬を積み、たった1基の体当たりで敵国の空母を瞬時に轟沈するほどの威力を持つ。

回天を発案したのは、自ら特攻に身を投じた青年士官たち自身であった。

搭乗を志願した者のうち、最も多かったのは、航空機に乗ることを夢見ていた予科練出身者たち。最年少はわずか17歳の少年。

回天を搭載して、出撃した精鋭潜水艦はのべ32隻。執拗な敵艦の攻撃を前に、8隻は二度と還らなかった。

彼らの多くは、極秘の特攻兵器「回天」で逝くことを心に秘めたまま、家族や愛する人に、最後の別れを告げた。

死と隣り合わせの猛特訓の中、15人が出撃の願い叶わず、その命を落とした。

3度の出撃で、不運の帰還に泣いた搭乗員も、4回目の出撃で、本懐を遂げた。

回天には内部から開閉できるハッチがあった。しかし、水圧が高いと搭乗員には開けることができない。

一度潜水艦を離れると、停止、再起動は不可能な回天。敵艦に体当たりし得なかった時には、幾度も繰り返して標的を追った。

戦死した搭乗員89名、殉職者15名、自決者2名。また、回天搭載潜水艦と共に散った出撃整備員は35名、潜水艦乗組員は812名にのぼる。

極秘の兵器とされた回天、その戦果は、いまだ多くが確認しえない。戦いの結末は、突入を果たしたすべての若者たちが知っている。

■ 生還ののぞみはないと知りながら、新兵器の搭乗を志願した若者たち  
回天搭乗員の募集が始まったのは、1944年(昭和19)7月初旬。

募集の方法は、紙片を渡され、熱望するものは◎、希望者は○、希望しない者は無印で、分隊、班、氏名を書いて、5分以内に提出せよ、というものであった。予備学生等は数時間、考慮する時間を与えられたようであるが、他人と相談することは禁止されていた。

募集にあたっての説明は、

「①今や、敵の反撃は随所に熾烈を極め、戦局は急激に緊迫、真に皇国興廢を決するの秋至れりというべし。この秋にあたり、我が海軍においては有力なる特殊兵器をも使用し、この驕敵粉碎し国防の重責を全うせんとす。右特種平気は挺身肉弾一撃必殺を期するものにして、その性質上特に危険を伴うものなるが故に諸子の如き元氣澆刺且、攻撃精神 特に旺盛なるものたるを要す。

②選抜せられたる者は概ね3ヶ月から6ヶ月間、別に定められたる部隊にて教育訓練を受けたる上、直ちに第一線に進出する予定なり。

③本兵器の搭乗員となりたる者の身分待遇はすべて航空機搭乗員と同格、またはそれ以上に取り扱う。

備考：兵器名は示さざるを要す。」

という以上には何もなく、どんな兵器なのかも推量することしかできなかった。

## ■ 命がけの搭乗訓練

命がけの訓練が繰り返される基地での生活。

緊張と厳しさに包まれた日々の中で、搭乗員たちは、「敵艦にうまく突入すること」だけを目指し、1日でも早く回天の操縦技術を身につけようと必死だった。

しかし、飛行機や戦車と違い、初めのうちは回天には技術書も教範もなく、1回1回の搭乗が操縦法の基幹となった。当然ながら、搭乗訓練のすべてが命がけだった。

搭乗員として、出撃できるようになるには、こうした命がけの搭乗訓練を20回くらい行う必要があった。しかし、回天は兵器としては、まだ不備な面も多く、しばしば故障した。

また、搭乗員の数に対し、訓練用の回天ははるかに少なかった。そのため、整備課員たちが不眠不休で整備しても追いつかず、搭乗訓練の順番はなかなか回ってこなかった。

## ■ 突入 その瞬間まで刻む命

薄暗く狭い回天の艇内に独り座り、  
刻々と死に向かって突進する、わが身、わが命。

愛する者を、国を守るために選ばれた誇りを胸に、  
ただひたすら「命中」を祈る。

かすかに聞こえる敵艦のスクリュー音に耳を澄まし、  
震える手で特眼鏡を握りしめる。

敵艦との距離はわずか500メートル。

自爆装置のスイッチに手をかけたまま、必死に秒針の動きを追う。

汗ばむ手のひら、高まる鼓動は、生きている証し。

人生の終章を確かに刻む、突入までの数十秒間に、  
彼らが何を思ったか、何を叫んだか—————。  
それは、決して計り知ることはできない。

愛する者の笑顔、友の言葉、故郷の美しい光景、

そして祖国の行く末を思い、  
最期の瞬間まで、幸せな未来を夢見ていたに違いない。

## ■ 多間隊 出撃

伊号第366潜水艦は、1945年(昭和20年)8月1日、5基の回天を搭載して、光基地を出撃。



成瀬謙治中尉、鈴木大三郎少尉、上西徳英一飛曹、佐野元一飛曹、岩井忠重一飛曹の5人の搭乗員を乗せて、沖縄東南方面へ向かった。

8月11日。潜水艦は、パラオ島北方 500 カイリ、沖縄とウルシーを結ぶ洋上で、米軍の大輸送船団と遭遇。

非常ベルが鳴り響く中、「総員 戦闘配置に付け！」の号令が下り、潜航を開始した。

時岡隆美艦長の「行くか」の言葉に、真新しい飛行服に白いマフラー姿の成瀬中尉は「はい。行きます！大変お世話になりました。伊号第366潜水艦のご武運をお祈りいたします」と答えた。その後、司令塔から出た成瀬中尉は艦の後部まで出向き、乗員1人1人に敬礼。

搭乗員は交通筒を通して、回天に乗艇。

艦長の「発進！」の命令で、成瀬艇はドスンという固縛バンドが外れる音を残して、同潜水艦を離脱。

<発進用意、エンジン始動！>の号令と共に、ガガガガッーと轟音が艦内に轟く。

続いて、発進回天の留金がガタンと音を立てて外れると、回天はググッー、ガーッと轟音を発し、白い小さな気泡を残して海中に消えていった。

こうして、遂に成瀬中尉は敵艦に体当たりを敢行、還らぬ人となった。

その後、上西艇とつながれた電話の連絡員は電話の向こうから微かなすすり泣きを聞いた。しかし、その直後発進の命を受けた上西一飛曹は「万歳！」と叫びながら潜水艦を後にした。

後を追うように、佐野艇が発進。

その後、3度の爆発音を聞いた艦長は、「命中！3隻轟沈」と叫び、全員で黙祷した。

終戦までわずか4日前のことだった。

<池田勝武(伊号第366潜水艦に同乗)>

4日後に終戦になろうとは誰が思っていたらよいか、

もし船長だけでも、知っていたら決して「回天発進」の命令など出さなかったはずだ。

深度70メートルでじっと敵輸送船団の通りすぎるのを待てばいいのだ。

温情のある時岡艦長なら、きっとそうしただろう。

国のためとは言いながら、あと4日敵輸送船団に遭遇しなければ彼等3人も私達同様に、今も元気で過ごしているかと思うと、いっそう胸は切なく悲しい思い出に満たされる。

上海事変では、廟行鎮の戦いで散った爆弾三勇士の話があり、歌にまで歌われて広く国民の間で英雄視されているが、しかし我等多聞隊の三勇士は世の中には知られず、ひとり我々だけが知っている悲しい物語である。そして、それは誰もかえりみようとしない歴史の中に消えてしまいかねない物語である。

そんな3人を悼んで私は心から感謝の気持ちを込め、「ああ 若桜の血が叫ぶ」の歌を作詞した。

決して、三勇士のことを忘れないためにこの心を込めている。

現在ある日本の平和は、この回天三勇士をはじめとする多くの陸海空将兵の命によってあがなわれたことを忘れてはならない。

ただただ君らの勇気には涙あるのみ。

戦後何年経っても忘れることのできない昭和20年8月11日の夕刻生々しい記憶。

私たちは、絶対にこの忘れることのできない真実を後世に伝え残さなければならぬ。



いや必ず伝えて欲しい。百年後、千年後でも、地球の存する限り。

私は心から冥福を祈って、この文を終える。

## ■ 佐野元さんの遺書

(潜水艦に乗った8月1日から出撃11日までに書かれた日記)

### ●8月3日

<教練回天戦容易、搭乗員乗艇、発進用意>にて乗艇、電話異常なし。  
整備員が実際の場合と勘違いし、起動弁を開く。  
起動弁より相当漏気あり。後で、起動弁を取り出し、衛帯を換装、漏気止まる。  
本日、成瀬隊長からはじめて賞められる。

訓練に訓練を重ねて来たり義烈隊、前途に栄冠あれ。  
隊長と語り合い、トランプ、碁などして時間を過ごす。

1600 浮上。

回天操舵機を作動してみる、異常なし。

上甲板にて整備の結果、深度機室、前部浮室浸水なし。極めて良好。

水も空も共に澄み渡り、日没近し。

搭乗員艦橋にて思い出語る。

十有八年の人生も思い出多し。

訓練に 訓練重ね わが隊の

戦果を見よや 四方(よも)の人々

### ●8月5日

0900<回天戦用意、魚雷戦用意>、

搭乗員の意気衝天。敵機動隊に遭遇す。

鍛えし我が神髓を発揮せん時は来たれり。

只、天皇陛下の万歳を叫ぶのみ。

今こそ、小学校、中学校の各恩師、入隊以来の各教官に報恩の時、

旨に七生報告の決意固く、大君のため、只一条の誠心に、

只只突入あるのみ。

敵部隊距離4万メートル、速力大。

<回天戦用意、用具収め>



遂に、大敵を逸す。搭乗員無念の齒がみをなす。  
敵艦隊北上す。潜望鏡観測不能。

「多聞隊の歌」(自作)

- 一、光をあとに幾千里  
あの感激をそのままに  
潜水艦は南進す  
ああ殉皇の多聞隊
- 二、敵を求めて今日も又  
必死必中の訓練に  
眼血走り口はさけ  
ああ殉皇の多聞隊
- 三、搭乗、整備、回天は  
完全無欠ぞ敵艦に  
一身かけて体当たり  
ああ殉皇の多聞隊
- 四、滅敵の意気天を働き  
会敵圏に我はあり  
忠に死するは明日なりや  
ああ殉皇の多聞隊
- 五、今日か明日かと待ちつるに  
我が突入の時は来ぬ  
一身忠に満ちたるか  
ああ殉皇の多聞隊

●8月6日

朝食後艦橋に上がる。東天明るみ、太陽将に出んとす。

これこそ神州の曙の如き心地なり。

水平線の遥か彼方を眺めて明日の会敵を祈る。

北極星が輝く高度 24 度、到頭北緯 24 度に来たる。

沖縄東方 300 浬(カイリ)とか。

電報、2245、敵水上艦艇、東経 134 度 20 分、北緯 22 度針路 10 度という。

いよいよ会敵圏内に入る。明日あたり、会敵の算大なり。

北極星は幼きころより眺め、北斗七星と共に、予にとっては監視者如く感ず。

割れに天神地祇有り、父母兄弟あり、只断行あるのみ。

北極星、北斗七星は予科練入隊より幾度眺め、故郷を偲び、

亡き祖父及び父母に奮闘を誓いしことか。南十字星を見ん。

我朽ちたる後も星たちは太平洋上にきらめくことならん。

父上様、母上様、祖母様。

休暇のときは、何も真実を語れず、只語れるのは嘘のみ、何たる不幸ぞ。

しかし、軍規上致し方なし。黙って決別の他なし。

やがてわかることならん。わが生存中の我儘切にお詫び申す。

父母に先立つは、長男として申訳なけれども、大君のためなれば何の父母であり、兄弟なるか。胸中に神州の曙を画き、勇んで敵艦船と大和魂との激突を試みん。**実に爽快なり。**

### ● 8月11日

1730、敵発見。輸送船団なり。

我落ちてきて体当たりを敢行せん。

只、天皇陛下の万歳を叫んで突入あるのみ。

さらば、神州に曙よ来たれ。

七生報告のはちまきを締め、祈るは轟沈。

### 3. 出撃前、元さんが旅立つ前に家族に伝えたかったこと。

出撃前、休暇で京都に帰省した佐野元さんは、弟さんと先祖の墓参りをして、夜は土産の乾パンを食べたりして、一時を過ごした。

そして、翌日 帰隊するために駅まで送る途中の中で、「判ったか、判ったか！」と語気強く言った兄に、弟はただ、「判った！判った！」と繰り返し応じるだけの最期の別れだった。

終戦の詔勅が報道された8月15日の新聞で「特攻の偉業 8月11日南太平洋上にて、敵輸送船団を轟沈！」の記事の中に、兄の氏名を確認し、戦死を知る。

後に、弟の翁(しげる)さんは、仏壇のそばに、紙に包まれた兄 元さんの「爪」を見つけた。家族との最期の別れだということさえ、自分の胸のうちに秘め、仏壇のそばに遺品を残した兄 元さんの思いは計り知れない。

### 5. 全国回天会 会長 小灘 利春さん (「人間魚雷 回天」ザメディアジョン より)

「今を生きる人に伝えたい」

60 数年前、この国には、己の命をかけて愛する人を 祖国を守ろうとした若者た

ちがいた。

大東亜戦争末期、窮地に追い込まれた日本軍を守るため、自らの命をかけて人間魚雷「回天」とともに遙かなる海に散った若き特攻隊員たちのことをご存知でしょうか？

大東亜戦争末期、敗戦が色濃くなった日本では、人間魚雷「回天」という特攻平気が考案されました。若者たちは、自分の命を最大限に生かす手段として、わが身を兵器と同化させることを自ら志願したのです。

回天の搭乗員たちは、勲章とか名誉のために「必死」の任務に就いたのではなく、ひとつしかない自分の命を捨てることで、大切な祖国と愛する人々を守ろうとしたのです。その真実、その思いを、今を生きる人に正しく伝え、認識してほしいと思います。

かけがえのない命が失われる戦争は決して、あってはなりません。

そして、回天で散った若者たちの「なんとしても国を守り抜こう」という気持ちを目の前にしたとき、私どもは自分自身のあり方、生き方を顧み、より良いものにしていかねばと思うのです。そして、「守りたい」と思えるような平和で素晴らしい社会を築いていきたいと心から願います。「回天」によって亡くなった方々のご冥福を心から祈りつつ、その思いを未来へ伝える努力をしていきたいと思っています。

## 6. 佐野元さんの生き様を通して感じたこと。

19歳という若さで、回天に志願。命がけで家族を守ること。

迫り来る敵を前にして「回天」は愛する人や故郷を守るために残された、ただひとつの道であったから、迷いなど無かったのだろうか。

今、「家族」という意識が薄れつつある現代、ここまで愛する家族のために、まさに「命がけ」の行動に出ることが、自分にはできただろうか。

当時、この時代に自分が生きていたら、この必死の兵器に乗ることを自分は志願したのだろうか。

こんなに平和な時代に生きているから平和ぼけしているのか、「戦争」の歴史など、頭の片隅に追いやられてしまっていないだろうか。

戦没者の墓を見るたびに、彼らが、日本を守るために、戦地でどんな恐ろしい思いをして、戦ったのだろうかと思いを馳せるだけで、つらい気持ちになります。

そして、戦死の知らせを聞いたご遺族はどんなに、辛かったことと拝察いたします。

今、私達は、今もなお、太平洋に眠っているであろう戦士者たちに敬意を表し、また、この歴史を後世に伝え続けていく責務があると思い、彼の歴史・生き様を、ここで、一人でも多くの方に知っていただくことができれば幸いです。

## 6. 故人のお墓

亀岡市(大井町) 清現寺 境内墓地



---

## その他 参考資料

### ● 回天に関する映画

- [潜水艦ろ号 未だ浮上せず](#) (1954年)
- [潜水艦イ-57 降伏せず](#) (1959年)
- [人間魚雷回天](#) (1955年 新東宝/原作津村敏行)
- [人間魚雷出撃す](#) (1956年)
- [海軍兵学校物語 あゝ江田島](#) (1959年)



- [南太平洋波高し](#) (1962年)
- [人間魚雷 あゝ回天特別攻撃隊](#) (1968年) <sup>[11]</sup>
- [出口のない海](#) (2006年 [松竹](#)/原作[横山秀夫](#)、監督[佐々部清](#)) <sup>[12]</sup>
- 「[真夏のオリオン](#)」(2009年東宝邦画)

## ● 回天に関する書籍

- 雑誌「丸」編集部『写真 日本の軍艦 第12巻 潜水艦』(光人社、1990年) [ISBN 4-7698-0462-8](#)
- 『特攻回天戦～回天特攻隊隊長の回想』 小灘利春＋片岡紀明著・(2006年) 光人社
- 『回天の群像』 宮本雅史・2008年、角川学芸出版
- 『特攻 最後の証言』 (アスペクト、2006年)
- 『回天』 回天刊行会 (昭和51年)
- 『回天特別攻撃隊 写真集』 全国回天会編 (1992年)
- 『あゝ回天特攻隊－かえらざる青春の記録』 横田寛 (昭和四六年、光人社)
- 『人間魚雷回天』 神津直次 (1995年、[朝日ソノラマ](#))
- 『戦士の肖像』 神立尚紀 (2004年、文春ネスコ)
- 『「回天」その青春群像』 上原光晴 (2000年、翔雲社)
- 『特攻兵器・回天と若人たち』 鳥巢建之助 (1983年、[新潮社](#))
  - 『特攻回天戦～回天特攻隊隊長の回想』 小灘利春＋片岡紀明著・[2006年](#) 光人社
  - 『人間魚雷 回天』 [ザメディアジョン](#) 2006年
  - 小島光造『回天特攻 人間魚雷の徹底研究』光人社

## ● 回天に関する博物館・記念館

- [周南市回天記念館](#)

<http://www.city.shunan.lg.jp/section/ed-sports/ed-shogai-bunka/kaiten/index.jsp>

- [回天記念館 \(英語\)](#)